

方丈記私記

映画文学人生論

堀田善衛 (1918-1998)

『方丈記私記』(1971)「筑摩書房」

『広場の孤独』(1951)「中央公論社」

『インドで考えたこと』(1957)「岩波新書」

『定家明月記私記』(1986-88)「新潮社」

世中にある人と栖と、またかくのごとし

堀田善衛の『方丈記私記』は、七百五十年以上前の鴨長明『方丈記』の記述を自分の経験と重ね合わせて書いた私記である。

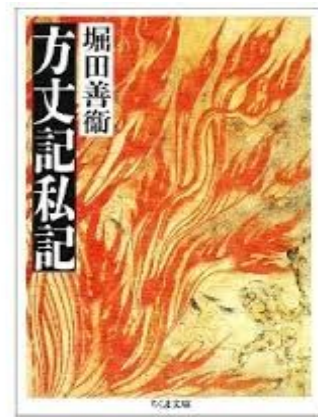
『方丈記』といえば、「ゆく河のながれはたえずして、しかもゝとの水にあらず」という無常感で知られている。この無常感は、地震、大風、火事、戦乱、飢饉などに苦しめられつづけてきた日本人にはわかりやすい。ふだんは忘れていても、天災に見舞われ、ひどい目にあうと、思い出す。

堀田善衛は昭和二十年三月九日の東京大空襲の夜、目黒区洗足にある友人の家で茫然として真っ赤な夜空を見上げていた。空中の巨大な魚類にも似たB29機が、くりかえしまきかえし、超低空を飛行していたが、憎しみの感情などは、すでにまつたくなかった。

一種の真空状態がそこにあつた。とはいふものの、火にまき込まれている人々のことを思わぬわけにはいかない。深川に住む一人の親しい女のことを思い、「その中の人、現(うつ)し心あらむや」という『方丈記』の言葉を思いだした。

「現し心あらむや」、生きた心地がすまい、などと試みてみたところでもうにもなるものでもない。彼は人間存在の根源的な無責任さを自分自身に痛切に感じた。

その後、『方丈記』を集中的に繰り返し読み、世界の古典文学のなかでも珍しい一種の住居論で



方丈記私記

映画文学人生論

あることに気がついた。安元三年の大火、治承四年の大風、また同じく治承四年の遷都、養和の大飢饉、長承の連続大地震などのことを、そのほとんどが人間の住居というものにかかわって叙述されている。「世中（よのなか）にある人と栖（すみか）と、またかくのごとし」。

この鴨長明という人は、なんにしろ何かが起ると、その現場へ出掛けて行って自分でたしかめたいという、一種の実証精神を持っていたと、堀田善衛はいう。

また、治承四年の福原遷都で、「古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人は皆浮雲の思ひをなせり」と書いているのに注目して、鴨長明の歴史感覚を指摘している。

実証精神とか歴史感覚とか、あるいは根源的無責任という言葉も鴨長明が知っていたとは思えない。そのような言葉を使うのは堀田善衛だ。諸行無常——言葉も無常である。

堀田善衛は、終戦を上海で迎えて、祖国喪失を体験し、戦後はインド、ソ連、チェコ、スペインなどで世界の政治家や文学者と交流した。国際派の進歩的文化人として知られているが、アガサ・クリステイの推理小説を翻訳し、怪獣映画『モスラ』の共同原作者の一人になったりもしている。

ありとしある人は皆浮雲の思ひをなせり